地域の魅力 再発見！

各地区二十歳の集い実行委員会からのメッセージ。
地域の自慢や懐かしいあの想い出など、
ふるさと自慢が大集合!!

竜丘 古墳から学ぶ竜丘の魅力

竜丘地区の魅力とは？豊かな自然と数多くの文化、そして暖かい地域の方々。それが竜丘地区の魅力だと思います。

小学校の6年間で「丘のみちしるべ」として多くの自然、文化を地域の方々から学んできました。今回二十歳の集い実行委員の地域学習として昔は難しかった竜丘の文化、歴史を改めて学んできました。

竜丘地区の誇れる存在といえば〔古墳〕。ホームページにも、公民館の壁にも古墳の代表的な形である前方後円墳が描かれています。竜丘地区には多くの古墳があり、飯田古墳群に指定されている古墳のうちの約半数を竜丘地区が占めています。現存している古墳の数は26基、消滅して痕跡の無いものまで合わせると約140基の古墳が竜丘地区には存在していました。古墳は簡単に言うと権力を持った偉い人の墓です。飯田市にこれだけの数の古墳があったということは当時、強大な権力を持っていたヤマト王権との関係が深くあった人がその数いたということになります。県内の古墳文化として最初は北信地域から始まりましたが5世紀の半ばころ南信地域に移動しました。ヤマト王権の国家統治の変化に連動して、馬と兵の供給が南信地域から行われ、その中核として竜丘が重要な役割を果たしており、たくさんの古墳が残っていることにつながってきています。

学習をする中で古墳内にある埋葬施設である「石室」に入ってみたり、古墳祭りで野焼きする「埴輪」を作ってみたりなど、小学生の頃に学んだことを約10年越しに体験させてもらいました。古墳まつりが行われる塚原二子塚古墳では市内では2番目に大きな前方後円墳を見ることができます。古墳上部に遮蔽物がなく、古墳全体が見通せる古墳です。花いっぱい活動などを通して緑地保全が行われ、きれいな景観が保たれています。上川路地区にある馬背塚古墳では石室内に入ることができる古墳です。石室内に入ることができる古墳も今は数少なくなっておりとても貴重な古墳になっています。古墳の周りの装飾品として埴輪があり、今回は円筒埴輪を造らせてもらいました。土と水を練ってできた粘土を型枠に押し固め一枚の板状にしてから、筒状へと組み上げていきます。突帯を付け間に透かし孔をあけ乾燥させ焼いて完成させます。単純な作業にはなりますが少しでも手を抜くとひびが入り熱を入れると破裂する、とても繊細な物になります。

古墳の見学と埴輪を造るにもたくさんの地域の方に教えてもらいたくさんのことを学ばせていただきました。竜丘の自然、文化、歴史、地域の方の温かさ、竜丘地区のすべての魅力を大切にしていきたいと改めて感じることができました。

川路 天龍峡の昔と今

私たちが生まれ育った川路には「名勝天龍峡」という美しい峡谷があります。幼い頃から当たり前のように存在していて、特別な魅力を感じたことはあまりありませんでした。しかし、最近では、県外車を見かけることも多く、天龍峡から、この地域の魅力を再発見できるのではないかと考えました。

先ず始めに、天龍峡の歴史に詳しい川路まちづくり委員会前会長の中島良彦さんに、お話を伺いました。天龍峡の遊歩道を進むと、「つつじ橋」という吊り橋があり、そこからは「龍角峯」という迫力ある岩彫を眺めることができます。それを含む「天龍峡十勝」については、あまり知られていませんし、私も中島さんにお話を聞くまで知りませんでした。

「天龍峡十勝」とは、明治時代に関島松泉や日下部鳴鶴らによって選ばれた、天龍峡の特に美しい景観10選のことです。「烏帽石」、「姑射橋」、「烱烱潭」、「芙蓉峒」など、それぞれに名前がつけられています。中島さんのお話から、かつて天龍峡の美しさに心を動かされ、この地を名勝として守り伝えようと尽力した人々がいたことを学びました。

次に、実際に天龍峡を体感するために、天竜ライン下りに乗船しました。天候に恵まれ、秋晴れの暖かい陽気の中で、美しい紅葉や十勝の景観を眺めることができました。最近では、川底の土砂堆積の影響で水位が低下し、従来のように下流まで下ることが難しくなっていますが、静岡や愛知などから観光客が訪れ、天龍峡にしかない景色を満喫している様子でした。

私にとって、これまで〝当たり前〟だと思っていた川路には、「川路にしかない魅力」があることを改めて実感しました。現在、私は県外で一人暮らしをしながら大学に通っていますが、川路は私にとって心の休まる大切な地元です。昔の人が大切に守り抜いてきたこの川路を、私たちも大切にしていきたいです。

千代 千代の魅力は人 ～やっぱりうちらが本当友だちだな～

私達は地元の特産品を使ってすき焼きを作り、思い出の小学校に行きました。まず生産農場岡本養豚さんにご協力頂いて千代幻豚のお話をお聞きしました。千代幻豚とはヨーロッパで天然記念物とされている珍しい品種をもとにした豚です。ここではご飯にこだわっており、独自のブレンドを 30年守り続けています。千代は空気や水の綺麗さ、地域の人たちの理解があり飼育とても適した環境だとお話いただきました。そんな地元を盛り上げ知ってもらいたいという想いが千代幻豚には込められています。次に太田農園さんにご協力頂いて千代ネギのお話を聞きました。千代ネギとは信州の伝統野菜に認定されているネギです。

関東の白ネギと関西の青ネギそれぞれの良さを持っており、余すとこなく味わえます。栽培するうえで肥料、農薬、土寄せなどの工程が厳しく定められており、大量生産が難しいため希少価値が高いです。今回お話をお聞きしたお二方とも育てるうえでこだわりを持っており、それが自信や誇りにつながっているのだと感じました。そして千代を広めたいという想いや、千代に愛着を持って地元を大切に想い、活動をしている姿を見て感動しました。

千代幻豚や千代ネギは小学生の時も給食で食べましたが、今回、地域の方のお話を聞いた上で食べた味は当時よりも美味しく感じました。

そして思い出の小学校訪れました。全ての教室を周り6年間の思い出に浸りました。当時は大きく感じていた教室や机たちが8年の時を経ても変わっていないことに感動したと共に、それでも私たちから見える景色が変わっていることに改めて8年という長さを感じました。

最後に、保育園から中学校まで十数年を共に過ごしてきた地元の友人とは、気負わず自然体でいられます。長時間の中で育まれた安心感や心地よさがあり、「やっぱりこの仲間が本当の友だちだな」と感じ、大切な存在だと再認識する機会になりました。

上村・南信濃 道の駅遠山郷リニューアルオープン！ ～わたしたちの地元～

私たちの地元遠山郷は自然豊かで、人が温かくジビエなども豊富で素敵な場所です。二十歳の集いを機に地域の魅力とは何か考える中で、沢山の資源が思い浮かびましたが、代表的なシンボル「道の駅遠山郷」を地域学習のテーマに活動をすることになりました。

「道の駅遠山郷」は、メインとなる温泉施設「かぐらの湯」を目当てに、年間来客数十万人という多くの方が利用していました。ですが、令和2年1月に温泉の源泉ポンプ落下事故が起こり、そこから休業を余儀なくされ、当時の運営会社も撤退しました。実際に現在運営されている遠山GOの方にお話を聞き、遠山郷は南の玄関口でもあり、三遠南信やリニア新幹線などの開通を控えるなかでの施設となることから、もう一度地域をあげて再開したいと動き出したそうです。5年ほどかかりましたが無事にリニューアルオープンを迎え、今では地元の方はもちろん県外の観光客の方も多く、賑わいを増しています。昔の良さを活かしつつより改善出来るところを探し、24時間休憩スペースを設けたり、気軽に利用できるよう土足で入れるようにしたりと進化し続けています。

地域学習を通して、私たちは一日駅長という貴重な体験もさせていただきました。バイクの方に聞取りをして、やはり多く聞けた声は「再開してとても嬉しい」「これから更に進展してもらいたい」などプラスな意見が多かったです。このように、多くの期待をされている「かぐらの湯」が私たちの地元遠山郷にあることは自慢です。地域の中心として多くの人を繋いでいることが分かりました。「道の駅遠山郷」では毎年イベントが開催されているので、積極的に参加したりSNSなどを使って宣伝していきたいと思います。

最後に地域の方の温かさや努力を知り、今まで以上にふるさとを大切に思うようになりました。20歳という節目に、改めて地元の魅力を感じることができ本当に良い経験になりました。

山本 山本での思い出

私たちは想い出を振り返るために小学校や保育園に行きたい！と思い小学校・保育園を訪れました。まず最初に小学校へと向かいました。卒業してからは中々来る機会がないので、校舎を見ること自体久しぶりでした。中に入り教室一つ一つを見て周りました。当時の教室の雰囲気と比べながら、飾ってある自由研究など見て「僕たちもこんなことしたな」や「そういえばこんなのも作ったか」などの想い出を語りました。1年生の教室を見た時には机と椅子のサイズに驚き、入学初日の想い出話にも花が咲きました。さらに探索していると、文集を見つけました。見てみると「将来の夢」や「なってみたいもの」など一人一人書いたものがあり、こんなこと書いたなと懐かしい気持ちになりました。次に山本・さくら保育園に訪れました。けん玉や竹馬など小さい頃にやった遊びなどをやってみました。どちらも今やると意外と難しく、なかなかできませんでしたが保育園の頃を思い出せる時間でした。卒園式の写真も見せていただけましたがみんな、今の面影があり誰が誰かは意外と分かりました。今回小学校、保育園を見て周り当時の想い出を楽しく語ることが出来ました。二十歳の集いは一生に1度しかない大切な場です。当時の想い出などをみんなで語り合いながら楽しんでいきましょう！

伊賀良 参加しながら振り返る伊賀良地区

私たち実行委員は、伊賀良地区での思い出を振り返っている中で、「地区の行事が懐かしい」という意見が多かったので、コロナ禍前の賑わいを取り戻しつつある「伊賀良地区運動会」と「伊賀良地区文化祭」に参加することにしました。

始めに、伊賀良地区運動会に参加しました。運動会は、伊賀良地区の7つ分館（下殿岡、上殿岡、三日市場、北方、大瀬木、中村、三尋石）が競う分館対抗種目（おみくじリレー、綱引き、ベストリレー）やかけっこ、借り物競争などの種目がありました。分館対抗種目は、分館の代表選手による意地とプライドをかけた戦いが展開されていました。また、各分館の応援も迫力があり、盛り上がっていました。私は借り物競争に参加しました。借り物競争は中学生が企画・運営している種目で、中学生のアイディアが入っており、他の種目では味わえない楽しさがありました。

次に伊賀良地区文化祭に参加しました。文化祭は、地区の方々による展示、音楽祭・芸術祭、各種催し物が行われていました。音楽祭・芸術祭では、小学生や地区の方々による演奏や合唱の発表があり、見ていて「こどもの時に発表したなぁ」と懐かしく思いました。各種催し物では、スタンプラリー形式で各コーナーを回りました。ニュースポーツ体験では、普段見かけないスポーツの体験をしました。ニュースポーツは老若男女が楽しめるスポーツで、体験してみると簡単なようでいて意外と難しく楽しかったです。

以上、二つの行事を参加してみて、どちらの行事も活気があり、伊賀良地区の良さを再認識する機会となりました。また、二つの行事に参加しているとやさしく声をかけれくださる方がいて、伊賀良地区の温かみも感じました。これからも地域の人と人とのつながりが続くように、20歳の私たちから積極的に行事等に携わり、盛り上げていけたらと思います。

賑わう文化祭

久しぶりの運動会

龍江　今の私たちにできること

11月3日(月)に地域学習として、ローカル居酒屋「ほたる」でお話を聞きました。「吉鍋」について、「ほたる」を営んでいるNPO法人七和の会代表の熊谷秀男さんに実行委員と2個上の先輩方と一緒にお話をお聞きし、その後に熊谷さんが作ってくださった吉鍋をみんなで食べました。吉鍋というのは龍江絆駅伝で食べたことがあって、美味しかった記憶があり、そのことについてお話を聞けるのは光栄だと思いました。いざお話を聞いてみると吉鍋ができた経緯など、知らないことだらけでした。私が食べていた頃の吉鍋は、まだ活動が始まったばかりであったことに驚きました。2015年の9月から本格的な活動が始まり、その年の12月には絆駅伝での試食会を実施しており、今からちょうど10年前で、私が小学校3年生で少年野球のチームで駅伝に出ていた時期でした。約10年ぶりに吉鍋を食べましたが、やっぱり美味しかったです。この吉鍋には吉鍋研究会というものがあり、「飯田漬物協会」「飯伊凍豆腐組合」「飯田味噌醤油工業協同組合」「飯伊調理師会」「みなみ信州農業協同組合」「飯田市」「飯田商工会議所」「飯田観光協会」「南信州・飯田産業センター」の9つで構成されていました。多くの方とのつながりを活かした力の入った取り組みだったのだと思いました。この吉鍋の作り方はとても簡単で、普段料理をあまりしない私でも作れそうだと思いました。今度家で作ってみたいと思います。

今回は吉鍋に関すること以外もお聞きしました。熊谷さんがこれまで取り組まれてきた活動や、今後龍江でやってみたいことなどについてです。その中でも特に印象に残っていることは、龍江にある街灯を一定時期に消灯するということです。これは、星空が綺麗な龍江をアピールするためだそうで、綺麗な星空を見るためには街灯のないところや山奥など周りに光が比較的少ないところじゃないと堪能できないからだと思いました。また、龍江にはキャンプ場があるので、キャンプ場ももっと色んな人に知ってもらえたらと思います。

地域で自分たちが何か活動を起こすわけではなくても、熊谷さんのように地域の中で想いをもって活動されている人ともっと関わりを持って、話をすることが大切だと思うのと同時に、まず今の自分たちにできることだと思いました。

三穂　懐かしさのなかを歩く

今回、私たちは20歳の節目の式典を迎えるにあたり、改めて生まれ育った故郷である三穂について学びなおし、ふるさとを見つめ魅力を再発見するため「ふるさとめぐり三穂」に参加し、その後数年ぶりの三穂小学校を探検しました。

「ふるさとめぐり三穂」は、小学生が三穂の名所を歩き、地域の方から説明をしていただく行事ですが、私たちも三穂の魅力を再勉強するために参加することにしました。

今回は、参加した3人の出身が伊豆木と下瀬であることから、立石のコースに参加させていただきました。

立石の名物である仁王門や雄杉・雌杉など、都会では見られないような自然や人々の営みの雄大さを感じられる名所を小学生たちと楽しく見て回ることができました。

また、私たちの時のふるさとめぐりの時には巡らなかった、倶梨迦羅神社にも訪れることができました。地元にはまだまだ知らないことがたくさんあると再認識し、当時の思い出を振り返るだけでない、新鮮な気持ちで参加させていただきました。

生まれ育った三穂の地から、様々な魅力を再発見することができ、故郷に懐かしい思いを馳せることができました。

ふるさとめぐりの後、そのまま三穂小学校の探検をさせていただきました。

8年ぶりに訪れる母校で、昔と変わらない教室の様子だけでなく、数年の中でコロナ禍など多くのことを経験した末に少し変わってしまった場所もありました。

特に、トイレの設備の新しさや、デジタル化が進んで配備された電子黒板、内容の変わったポスターなど、様々な目新しさも見られ、今の小学生たちとの学校生活のギャップに懐かしさや羨望などの様々な思いを感じました。さらに、今では使われなくなった学友林の奥まで入り、幾年の時間を経て崩れかけた足場が見られ、ついに閉鎖されて濁り切ったプールを見ることで、経ってしまった時間の流れが感じられました。

これらの2つの活動を通じて、三穂地区の活発な子どもたちや雄大な自然の景色を見ることで、地域の魅力を改めて感じることができました。

地元を離れ都会に住んでいても、また戻ってきたいと思えるような自慢のふるさとです。この故郷の活力を絶やさないように、忘れずに伝えて触れ合っていく大切さを学びました。